

# 小石元俊の水軍術伝授とその周辺

亀田 一邦

九州国際大学附属中・高等学校

受付：平成20年5月12日／受理：平成20年9月12日

**要旨：**小石元俊は西国漫遊中に三田尻で久保季道から水軍術の皆伝を受けた。本件を防長側に残る諸資料を中心として考察した結果、以下の5点が明らかとなった。

- (1) 水軍術の流儀は北川派能島流であった。
- (2) 久保季道は下関の富商山県屋の一族として確かに実在した。
- (3) 季道の次男が長府藩医の香取文伯であり、元俊と同時期に皆川淇園のもとで学んでいた。
- (4) 主な修学動機は生来の兵学嗜好に加えて、当時の萩藩教学界における水軍関係者のめざましい躍進を知った点に求められる。
- (5) 防長来遊は元俊に大きな収穫をもたらしたが、当地、ことに下関・防府医界のその後の発展に対しても多大な影響を及ぼした。

**キーワード：**小石元俊と防長、久保季道、北川派能島流水軍術、香取文伯、皆川淇園

## はじめに

関西における蘭医学の首唱者小石元俊は、青年期に永富独嘯庵と淡輪元潜両師の勧導に従い、医学研鑽を主目的として山陽、北部九州を歴訪した。元俊研究の権威山本四郎博士は出発年次を不明としつつも、当初は明和2年頃と推測、帰京については同4年及び遊歴6年の両説を併記した<sup>1)</sup>が、後に明和元年説を採り<sup>2)</sup>、帰京開業も明和6-7年頃と新たな見解を示した<sup>3)</sup>。上記の所説に従う限り漫遊期間はほぼ5-6年と見るのが至当で、比較的長い時間をかけて防長肥筑を回ったことになる。

その際、元俊は周防三田尻(防府)で久保季道なる人物から舟戦法の皆伝を受けた。この話は子息元瑞の口述を門人が筆録した「先考大愚先生行状」に「若年漫遊の時に、周防の三田尻にて久保彦右衛門と云人に水軍の法を皆伝して水戦の事には殊に委しかりし」<sup>4)</sup>(遺事第8)と明記され、また米谷桃邱の「小石大愚先生行状」もこの出来事を記載する<sup>5)</sup>。しかも兜理堂文庫には元俊宛の水

軍術秘伝書が現存し<sup>6)</sup>、これによって元俊の船軍法伝習が紛れもない事実であったことが確定する。しかしながら、本件の細部については種々の問題点が指摘できるように思われる。一例を示さば、教授者の久保季道についてさえ行状の記述は一致せず、以下のごとき相違を見る。

	元瑞「行状」	桃邱「行状」
名	沖	仲道
字	季道	*
通称	彦右衛門	彦右衛門
職分	萩藩儒官	*
著作	桃花洞遺稿	*

桃邱は『桃花洞遺稿』を平戸藩儒白石子春の著としており、この点は『国書総目録』と一致する<sup>7)</sup>。元瑞「行状」は文化6年の脱稿ながら、補遺は文政12年に追加された<sup>8)</sup>。該当箇所は後者に属し、年次からすれば文政6年以後の成立とされる桃邱「行状」<sup>9)</sup>の方がやや早い。この点のみを根拠として是非を決するには慎重でありたい。その他、

承伝経緯や修学地等に関しても議論の余地があるが、子細はどうあれ事後の展開から察するに、元俊来遊が防長の医学発展史上、甚だ注目に値する事象であったことだけは否定の仕様がな。特に下関と防府医界への求心力は生涯維繫され、当地医家への影響は絶大であった。

本論では以上の視点を前提とし、小石元俊の防長来遊の意義を久保季道との交渉を軸に考察する。そこでまずは元俊承伝の水軍術の系統分析から起筆することとし、次に教授者久保氏とその周縁部を探っていく。そうした上で双方の人的資源となった防長の儒医人脈を把握し、両者の結合が後々の下関・防府医界に与えた影響を論じ、さらには元俊の水軍術習修の背景に存在した明和期における防長側の諸事情にも言及したいと思う。

## (1) 元俊皆伝の水軍術流儀の解明

### (a) 免状・伝書の分析

元俊は医家ながら兵学にも造詣が深かった<sup>10)</sup>。この一見すると硬軟相反する分野への熱烈な嗜癖は主に小石家の出自(将種)と関係したが、これとは別に元俊は兵学説を積極的に援用して医理を語り、また理想の医家像にも兵理への精通を条件化していた<sup>11)</sup>ことから、遺伝的要素以上に古方派医学の修得が後天的要素として作用したと認められる。元俊の兵医同理説は、峻剤を用いる攻撃的治療を得意とした古方派医学の受容により胚胎したものである。兵学は水陸山川に戦って敗北せぬ方法を説く。医療も人体を舞台に展開する薬病闘争であり、医家対疾患の攻防戦に他ならない。その勝利法を追究する学問を医学であると規定するとき、両者は完璧なアナロジーとして存在し、兵理と医理は思想・技術的な類似性を所有することになる<sup>12)</sup>。このように医兵兩理を巧みに組み合わせて自論を補強する古方家はままあったろうが、兼学を実践し、双方に極意を会得した医家となると、同時代では小石元俊をおいて他にはなかった。

水軍術への関心も基本的には上述の生来の軍学嗜好と、次第に形成されつつあった兵医同理説の影響により湧起したものと考えてよい。研究者中には遺事第7の西下中、兵庫沖で暴風に遭い、破

船の危難を体験した話題と結びつけ、これが契機となったと推測する向きもある<sup>13)</sup>。しかし本条はあくまで参禅による不動心の形成をテーマとする挿話であり、元俊の沈着剛毅な性格が既にこの時点で備わっていたことを物語る点に主眼が置かれている。また元瑞は兵学関係の話題を第8に一括しており、水軍伝授の件もそこに記されるのであるから、西下時の失敗を反省して水軍術を学ぶに至ったとの脈絡が成立するとは思われない。その点は明白であるが、しかし先の2つの内的理由のみをもって船軍法の修学に及んだと軽々しく判断するのも控えるべきで、実質的契機については別に熟考を必要としよう。筆者は他に防長での人的交渉や萩藩学の動向といった外的要因との関連を想定するものであるが、これについては後節で言及したい。

さて究理堂文庫に現存する水軍術関連の免状・伝書類の内訳を見ると、いずれも久保彦右衛門冲季道から元俊に与えられたもので、①「兵法伝授免状」(1通)、②「秘伝目録」(1巻)、③「舟戦以律鈔船樊戦則」(1冊)の3種がある。伝授の年次は全て明和5年となっている。また関係文書に④『舟戦口伝控』(1冊)、⑤『舟戦貫書自得』(1冊)が見え、写本と思われる⑥『舟戦以律鈔』(5巻5冊)も2部所蔵される<sup>14)</sup>。このうち「秘伝目録」と「極意目録」については、幸いにも山本博士による写真版での紹介がある<sup>15)</sup>。それを書き下して示すと次のようになる。

#### 〔秘伝目録〕

##### 一、天幕水楯の秘伝

##### 一、楯の大事

##### 一、海上を察するに違ふこと無きの秘伝

但し百度見て百度違ふ無きの法

##### 一、変を察して適中せしむるの大事

但し千度察して千度中る

##### 一、凶悪を改変して吉善を祈祷するの秘伝

已上

#### 〔極意目録〕

##### 一、先んじて害を知るの習

##### 一、用捨の大事

一、別格一致

一、奇正

兵法に云ふ、三軍の衆、必ず敵を受けて敗るる無からしむべき者は、奇正是なりと。

一、虚実

兵法に云ふ、兵の加ふる所、礮を以て卵に投ずるが如き者は、虚実是なりと。

北川汶陽  
北川小平治  
源堅繁  
佐伯左源治  
藤原資維  
久保彦右衛門  
冲 季道

明和五戊子

臘月吉日

小石有素丈

花押

本状の日付から伝授は明和5年12月に行なわれていたことが確定する。元俊の漫遊日程は不明な点が多いが、明和3年秋の時点で筑前上座郡(金烏山中の蘭公精舎)まで西下していた事実が究理堂所蔵の元俊手写『維摩詰経』奥書<sup>16)</sup>により確認できるゆえ、三田尻伝授は往路の出来事ではなく、むしろ帰京の際に実現したものと考えるのが妥当であろう。

「極意目録」中の「奇正」「虚実」の両条にある「兵法云」は、ともに『孫子』勢篇からの引用である。本状は目録のため、核心は口伝されたと考えねばならず、現に究理堂には前述のごとく「舟戦口伝控」等が残っている。その直接の伝授者が1文字分高い位置から署名する久保彦右衛門冲季道であった。久保氏は本来、源平藤橘に代表される姓を書すべき位置に「冲」と記入している。前引2種の「行状」が「名冲」、「名仲道」と説明したのは、伝書におけるこの破格な記名法に起因し、解釈に迷った末に両人が出した別々の結論であったと考えられる。すなわち元瑞はこれを「冲」(チュウ)と音読する名と考え、一方の桃邸もその不自然さに誤脱を疑い、大胆に「仲道」(ナカミチ)と推測した。この不可解な署名の真意は一

体何かと考えるに、封建制下の所属身分と無関係ではなさそうである。思うに久保氏は士分に属さず、町人身分であったがため姓が知られなかったのではあるまいか。それゆえ「冲」なる瀬戸内水軍衆に所縁の名<sup>17)</sup>を代姓として用い、允許状の体裁を保ったものと見られる。ただ苗字持であったのは明らかで、この点は地方の富裕な中間的知識層に属したことを示唆しよう。詳細は後述するとして、とまれここでは元瑞と桃邸の行状がいずれも誤りである点を指摘し、「久保」「冲」ともに氏に該当し、諱が季道であった事実を示すに留めておきたい。

(b) 山口県立文書館蔵水軍書との比較

前掲伝書には流儀名が記されていない。元俊は果たしていかなる流派の水軍術を学んだのであろうか。ここではその点を解明する。

最初に名が置かれた北川汶陽(1690-1741)は、江戸中期における萩藩随一の軍学者である。北川家は代々片山流居合術をもって藩府に仕えたが、兵学諸流を極めた汶陽は独自に軍法を創出し、その名声は府下に聞こえ、門弟千余を数えた。晩年は山県周南の説く徂徠派学説の影響を受け、文学経術による武事潤飾を考究し、文武帰一説を唱えた。以上の事跡を見ても解るように、汶陽は当時の武人間には稀な学問と武術の調和を求めた才穎であり、家芸士にありがちな家法墨守の退嬰的姿勢が見られず、研究熱心な進歩的軍学者であったと評価できる人物である。

元俊の三田尻伝授は明和5年(1768)であったから、汶陽の生没年に照らせば、両者が同時代に存在しなかった点は自明である。よって末尾の署名は承伝の系統を表わしたものと判断してよく、元俊は北川流水軍術の4伝者に位置することになる。開祖汶陽は名を堅儔、字を小平二と称した。山根華陽「汶陽北君墓碣」(『華陽先生文集』巻8)<sup>18)</sup>によれば、汶陽には男子がなく、田中氏から養子を迎え家を嗣がせたという。これが次伝者の小平治堅繁(生没年不詳)である。父子相伝後の佐伯左源治については現段階ではよく判らぬが、文政期萩藩の水軍及び神器陣習練の参加人員中に北川

辨蔵と佐伯源左衛門の両名が揃って確認される<sup>19)</sup>。これにより北川、佐伯両家が萩藩船軍学の発展に貢献した家柄であったことが知られ、また同時に本伝書の有する権威性も指摘できるのではないかと思う。

萩藩の水軍術には、三島流、能島流、一品流が伝来し、この3種は全て村上水軍系に属した。しかし北川流なる呼称は文献上に確認できぬものである。前掲の「汝陽北君墓碣」及び角田九華『続近世叢語』(巻6)<sup>20)</sup>には、「是に於て心を戦略に潜め、世に伝ふる所の北条氏、山鹿氏、油井氏の兵法、三島の水戦法、皆学ばざる靡し」との記述があり、また伝存する汝陽唯一の著述『舟戦以律抄』<sup>21)</sup>にも同様の記事が確認される。本書は萩藩大組士の井上就光(徳寿、五郎右衛門、1638-1716)<sup>22)</sup>の口述を門人北川汝陽が編録した水戦書であり、汝陽の享保9年序が付されている。序文には「吾が流のごときは則ち三島の法にして、本源具さに挙げ、末流悉さに備はる。固より講武の規範、水師の準繩と謂ふべきなり」と、井上氏伝が三島流であったことが自記され、この点から汝陽の水軍術が三島村上氏流であったことが明らかとなる。では元俊が学んだ船軍術が三島流であったかというに、これについては元俊自身が「軍用の利方を尽し候ものは、三島の軍術に用る兵船に及ぶものなし」(遺事第8)<sup>23)</sup>と言及しており、そのように考えることも誤りではないが、筆者は厳密には別称が相応しいと判断する。

山口県立文書館には『舟戦以律抄』の他にいま1種の水戦書があり、名称を『能島流秘伝目録極意目録注解』という<sup>24)</sup>。内容は表題が示すように能島流水軍術の「秘伝目録」と「極意目録」に対する簡明な注釈である。冒頭には「則ち先師ヨリ秘習スル所ノ古伝也。秘中ノ秘成カ故、印可ノ時授之儀也。則秘伝目録ト是ヲ号ス」と由来を説き、「天幕水楯之秘伝」～「改変凶悪祈祷吉善之秘伝」までの5条を置く。第3～5の注解中には『舟戦以律抄』が引用され、能島流水軍術と本書が密接な関係にあったことが窺える。そして最後に「是迄則当流古来相伝秘習スル所ナリ尚口伝ヲ受ヘシ」と、「秘伝目録」が能島流水軍術の戦国以来

の古伝であることを教えている。続く「極意目録」には「先而知害之習」～「虚実、兵法曰、兵之所加如以碇投卵者、虚実是也」の5条がある。以上の『能島流秘伝目録極意目録注解』に記された諸条を、元俊に授けられた秘伝・極意目録と照合すると、驚くことに1字1句の相違もなく見事に一致する。また「極意目録」冒頭には「極意目録□云。前段ハ古来ヨリ伝ル所ノ趣ナル。是ハ堅儔工夫ノ伝也。極意トアレハ秘伝目録ヨリモ大切ニシテ軍法ノ眼也。此巻ハ古来ヨリノ伝ニ非ス。前ニ出ス秘伝目録ニハ其古文ノ奥秘ヲ述ルニ依テ堅儔則此秘目録ヲ潤色シテ戦術ノ奥儀ヲアラハス所ナリ」と注記され、前半「秘伝目録」が戦国以来の伝統的船軍法、後半「極意目録」は北川汝陽による改良新術であると位置づけ、萩藩能島流を学ぶ者は後者を重視せよと注解者は力説する。従って元俊が学んだ水軍術は、広義には三島村上流と解することも許容されるが、より正確を期するならば、能島流の古式船戦法を発展させた北川新流と考えねばならず、呼称としては北川派能島流水軍術とでも命名すべき流儀であったと結論づけられる。

元俊が諸種の水軍法中から北川派能島流を選択したことの意義はよく考える必要がある。戦国期に各地で活躍した海賊衆が経験知に即して各々独自に工夫開発した船軍法は、幕藩期の新支配体制の確立とともに実践運用の機会を失う。その結果、伝術の理論化、体系化が始まり、孫呉韜略の兵学思想を摂取し、経史の文辞で潤飾された水軍書が出現するに至り、ここに業家が伝授する水軍学の成立を見た。武家政権の幕府及び諸藩は軍学武術を奨励したため、船戦術も兵学の1領域を占め、主として西国の沿海諸藩に普及した。水軍流儀のうち、最も有名かつ完備したものは瀬戸内水軍中の精鋭たる三島村上流であり、とりわけ嫡流総帥に当る能島流は船戦法の精華であった<sup>25)</sup>。この点をふまえて分析すれば、北川派能島流水軍術は戦国以来、最高峰の古流水軍法の骨格を活かしつつ、さらに時代に即した刪約創意を加え、北川汝陽が家学家法として18世紀前半に完成させた当時の我国における最新の舟戦法であったと定置できよう。その点は三田尻船手衆の絶大な支持か

らも首肯される。元俊来尻17年後の天明5年、藩主毛利治親は三田尻の諸芸精励者を賞美、水軍術では能島流承伝の功により無給通以下の松井市郎兵衛ら5人が褒詞を賜ったが、そこに他流は見られない<sup>26)</sup>。当時既に古法は閑却され、能島新流をもって水軍流儀中の冠冕とする評価が萩藩内に定着していたのである。しかも当流は警固衆下班の業家小吏に学ばれており、様式より実用優先の流儀であったことが証明される。かかる流儀と元俊が偶発的に遭遇したとは考えにくい。諸般の状況から察するに、元俊は事前にある程度の子備知識と関連人脈を有し、これによって当代随一の水軍法の主体的選択に成功したと見るべきであろう。このように元俊は水軍術を学ぶ際にも進取の気象を存分に発揮しており、そこには旺盛な探求心や活法実益の重視といった医術に向き合う際に見られるのと全く同様な合理的精神が抽出される。

## (2) 伝授者久保季道に関する新資料の発見

### (a) 久保富完妻仲女供養塔

元俊の学んだ水軍術の流儀が確認できた所で、次に伝授者の久保彦右衛門沖季道なる人物の考察へと移る。伝授地とされた三田尻は萩藩船手組の根拠地であり、能島水軍後裔の村上家の管掌下に二千人を越す大集団が形成されていた<sup>27)</sup>。従って元俊が彼地で水戦法を伝習したとする記事は極めて信憑性の高い話といえる。しかるに当時の『業人分限帳』<sup>28)</sup>には久保氏を確認できない。さらに軍学者、武芸家、船手衆（大船頭5家、中船頭21家、小船頭20家）に範囲を広げても該当者はないのである。ならば元瑞が萩藩儒と紹介した久保季道とは果たして何者であったのだろうか。

萩領三田尻の教育は郷学の越氏塾を中心に展開し、そこに学ぶ船手組の子弟からは賢材が輩出した。しかもいったん衰微した越氏塾が明倫館分館として再興され、萩の儒員が輪番講学をするようになるのは明和4年9月、つまり元俊来尻の前年のことであった<sup>29)</sup>。あるいは久保氏は新制度の下、当塾教学にごく軽微な職分、例えば初学教導の句読師のごとき立場で参与したことも想定され、それならば「萩藩の儒官」と表現する点も納

得が行くが、ただ管見の範囲では防長側の関連文書中に久保氏儒役説を実証できるものはなく<sup>30)</sup>、今後さらに調査を進めて確認を急ぐ必要がある。

ところが先般、研究の進展に直結する石刻資料が下関市内の東部墓地に確認された。旧藩時代の下関には東西に大規模な共同墓地があり、支配地の位置関係により西（西神田町）に萩・清末両藩領の住民を、東（本町）に長府藩領、いわゆる本関の人々を埋葬するのが慣例であった。さて該当墓は占有区を煉瓦塀で囲む細長い山県屋の墓域内に存在する。後年改葬を経たものらしく、墓石は正面と左右に整然と配置され、そこに享保6年—明治9年までの大小30数基が並ぶ。山県屋は苗字に久保、松保、山県の3種を用いており、丸に違い鷹の羽を家紋とする。最も立派な松保智芳（山県屋卯右衛門、寛延3年8月15日没）の夫婦墓には「再興施主久保兄樹」の名があり、同人は別墓の敷台に利用する立派な板石にも施主として刻名されており、山県屋中興の祖ともいべき人物である。ただし兄樹の墓石は当地に確認できず、生没年等も明らかではない。

注目すべき墓石の第1は「仲女供養塔」で、重厚な造りからは当時の家格が想像される。刻字には「覚顔妙性／沖季道の嫡女／富完妻仲女塔／明和9年壬辰（1772）中冬23日」とあり、ここに三田尻で元俊に水軍術を授けた「沖季道」の名が見える。本塔発見の意義は大きく、これにより初めて季道の実在が裏付けられた。また寛保3年（1743）没の「芳智薫清信女墓」には「山県屋彦右衛門妻」とあるから、季道の妻女の墓と知られる。しかし季道本人の墓も当地にはなく、三田尻の水軍衆関連の墓地調査も試みて見たが、今もって発見するには至っていない<sup>31)</sup>。

次いで貴重と思われるのが、仲女の夫富完の夫婦墓である。明和7年4月20日に没した先妻崎女（中村氏5世、円智管月信女）との夫婦墓には、「教善了円信士／4代目山県卯右衛門尉富完／享和2年壬戌（1802）4月25日」と刻す。墓石は山県氏とあるが、富完が他に久保氏を称した事実は後述の「香取文伯墓碑銘」、及び皆川淇園門人帳に明徴を得る。以上の点から考えるに、久保彦右

衛門沖季道は確かに防長の地に実在し、山県屋の屋号を持つ赤間関の苗字持の町家久保氏と密接な関係にあったことが判明するのである。

やや時代が下る資料となるが、天保期の赤間関には山県屋と称する商家が7軒あった<sup>32)</sup>。これらは全て「山形屋」と記されるが、享保7年の三輪東臯13回忌法要の参加門弟中に「神宮寺町／山県屋平三郎」、「山ノ下／山県屋利助」が使われ<sup>33)</sup>、その反対に山県屋墓地には「山形屋市三エ門」(享保8年7月26日没)、「山形屋内おきよ」(安永6年12月6日没)と刻する墓石があることから、当時「県」「形」両字は互通していたと判断される。7家のうち各地の有姓諸家と姻戚関係を保ち、相応の墓所を構え得る家格となると、持上問屋から味噌の製造・販売業へと転じた神宮寺町の富商山形屋のみが該当するようである<sup>34)</sup>。天保期の当主は与左衛門、元治期の喜左衛門は中之町の永代小年寄役を勤めた。山形屋には別家が数家あり、大山形屋と称した本家は早くに没落したという<sup>35)</sup>。墓域に文政4年没の吉右衛門以降、幕末期のものが1基もない点は、上記の大山形屋没落の事情と関連するようで、あるいは天保期の山形屋は既に分家・別家筋であったのかも知れない。

没落前の大山形屋が当墓所の山県屋であったと考えるにはいま1つ根拠がある。それは「筑前芦屋浜篠原氏女墓」(宝暦4年5月24日没)の存在である。芦屋の篠原氏についてはよく分からぬが、元禄13年に筑前4郡の大坂向け藩米輸送を命ぜられ、芦屋新蔵元となった米穀問屋太田喜兵衛(丸尾屋)が篠原正左衛門の子であったという事実<sup>36)</sup>、また同地の岡湊神社の玉垣(天保5年奉納)中に篠原正兵衛の名が確認できるから<sup>37)</sup>、彼地の名家であったことは疑いない。前述のごとく当初山形屋は持上問屋であった。その主業務も大坂廻米であり、豪商丸尾屋とは全くの同業者である。俗に「芦屋千軒、関千軒」と両地は並置され、ともに商港として繁栄した。そのため通婚により姻戚となって商勢拡大を企図する問屋も少なくなかった。恐らく両家の交渉も商事上の接触から始まり、さらに当主実家の篠原家へと交流が及び、婚姻へと発展したものと推測される。以上の点か

らも大山形屋は当墓地の山県屋に等しく、元禄から宝暦にかけて下関で持上問屋を営んだ富商であったと見てまず間違いあるまい。

## (b) 香取文伯墓碑銘

さて当域にはより重要な情報を提供する古墓が存在する。それが約二百字の碑文を有する香取文伯の墓である。香取氏は長府藩の馬廻医(五十石)で立家はやや遅く家運の盛衰もあったが、2代文圭(吉田長淑門)<sup>38)</sup>と5代純庵(小石元瑞門)<sup>39)</sup>は蘭医として藩内の信望が頗る厚かった。また彼らは共通して文化人的資質を備え、多数の騷人墨客と交流し、府医中では松岡家とともに雅医の双壁と目されていた。初代文圭は香取太華(1721-1782)の名で『長門癸甲問槎』<sup>40)</sup>に登場する唯一の長府士であり、馬関で滝鶴台、山根南溟等、萩宗藩の錚々たる儒員にまじって朝鮮通信使との詩文交流に参加した雅人であった。

香取文伯(1754-1782)はこの太華の最初の養嗣子である。『藩中略譜』<sup>41)</sup>中の「香取家譜」及び日頼寺の香取家過去帳には未載で、かつて香取氏を調査した小川五郎氏にも言及がなく<sup>42)</sup>、筆者も今回の墓碑発見で初めてその存在を知った人物である。略譜は太華には男子がなく、小倉藩臣三宅五蔵男を娘婿に迎えて2代幽伯としたと説明するが、長府藩儒小田南陔の「宝樹院香取先生墓碑」<sup>43)</sup>(所在不明)は「初め某を養へども多病、又桂叢、字幽伯なる者を養ひて嗣と為す」と明記し、幽伯の前に養子のあった事実が確認される。香取父子は同じ天明2年に病没、太華は2月8日、文伯は3カ月後の5月14日に亡くなり、幽伯が跡目を相続した。南陔のいう最初の養嗣子が文伯であり、その実父こそ元俊へ水軍術を伝授した彼の久保季道であった。以下、墓碑を原文で掲げ、訓読を示す。

### [原文]

生諱平道字文伯一字一貫長門赤間関人久保季道之第二子也甫生長府藩医香取文圭乞養為己子文伯幼而好学年十四入於明倫館受業居六年而帰帰後請欲東遊文圭未之許生年二十五遂脱身来京従

余間業居三年会其家召生不得已帰一年而遂  
 発疾天明二年五月十四日没年二十九臨没猶曰恨  
 不得再遊京也其姨夫久保富完哀生志之不得遂也  
 乃來京詣余請銘其墓余聞而悲之為作銘曰何好學  
 之篤而其寿之不永也斯人而不得達豈固命也夫

天明二年壬寅秋九月平安皆川愿撰并書

〔書き下し〕

生、諱は平道、字は文伯、一の字は一貫、長門赤間関の人、久保季道の第二子なり。甫め生、長府藩医香取文圭、養ひて己が子と為さんことを乞ふ。文伯幼にして学を好む。年十四、明倫館に入りて業を受け、居ること六年にして帰る。帰るの後、請ひて東遊せんことを欲す。文圭、未だ之を許さず。生、年二十五、遂に身を脱して来京し、余に従ひて業を問ふ。居ること三年、会々其の家、生を召し、生已むを得ず帰る。帰ること一年にして遂に病を發し、天明二年五月十四日没す。年二十九。没するに臨んで猶ほ曰く、京に再遊を得ざりしを恨むなりと。其の姨夫、久保富完、生が志の遂げ得ざるを哀しむや、乃ち來京して余に詣り、其の墓に銘せんことを請ふ。余聞きて之を悲しみ、為に銘を作る。曰く、何ぞ学を好むことの篤くして其の寿の永からざるや。斯の人にして達するを得ざるは、豈に固より命なるかな。

天明二年壬寅秋九月平安皆川愿撰并書

撰者は京都文壇の大御所として君臨した皆川淇園(1734-1807)である。この墓碑銘は『淇園文集』(文化13年序刊)後編卷1<sup>44)</sup>にも「香取文伯之墓碣」と題するものが収録されているが、両者を比較すると12箇所及ぶ字句の異同が確認される。本節においては特に大きな相違と断ぜられる4点に限り、以下に掲げて示すこととした。

淇園文集	墓碑刻字
諱文伯、字某	諱平道、字文伯
久保季道之第三子	久保季道之第二子
既又請其父文桂西遊父未之許	歸後請欲東遊文圭未許之
安永二年五月十四日卒	天明二年五月十四日卒

碑刻の際には実状を知る者が文中の過誤を訂することがあったろう。名字や卒年に関する淇園の記憶違いは遺族側には看過できるものではなく、巨儒の文とはいえ改める必要を感じたはずである。その作業に中心的役割を果たしたのが、淇園のもとに遥々と出向き、墓碑を依頼した文伯の姉婿に当たる4代山県右衛門尉こと久保富完であったと思われる。

文伯の養父香取太華は古方派の名医香川太仲門で修業を積んだ後、赤間関に町医として開業した。太華の馬関診療期は、独嘯庵が古方を用いて当地に本格的診療を行なった時期とほぼ重なる。当時長関の地に勢力を誇ったのは、後世方派の大家香月牛山(小倉藩医)の一門であった。馬関には永富友庵、藤江玄雄が流行医としてあり、藤井問庵は府医に登用されて医療<sup>45)</sup>・教学<sup>46)</sup>の両方面に実績を残したが、独嘯庵と太華の登場によって両派の形勢は逆転、長関は次第に古方主流の時代へと移行した。この点を南陔は「古医方の行なはるるは先生の力許多なりきと云ふ」と簡潔に記し、当地古医方の普及に太華が多大な貢献をした点を称賛する。下関での古方派医学の展開については、筆者を含めて独嘯庵偏重主義を反省し、以後は香取太華をも推進派の両輪として併記すべきである。従って正しくは主に上記両医の活躍により、18世紀半ばから漸次期待が高まったとすることが正しい叙述となろう。赤間関で古医方の普及に尽力した独嘯庵と太華の間には当然交流が予想され<sup>47)</sup>、太華の長府招聘に際しても、独嘯庵直系の松岡・小田両家の尽力があったものと推測される。

久保季道の次男平道が馬関古方派の先駆者たる香取太華の養子に迎えられる経緯については未詳であるが、養父太華と実父山県屋彦右衛門(久保季道)は養子縁組を取り決めるまでに懇意であったといえる。平道は幼少期より好学の秀才として衆目の認める所であった。それゆえに藩医家の後継者に指名されたのである。しかし本質的には山県屋久保家の地域社会での信用度、実父季道や義兄富完の個人としての人格識見も判断材料に加味され、それらに対する総合的評価となって両家の

養子縁組が成立したものと見なければならぬ。久保季道は一方に実力派藩医の養子となる賢児を育成し、また他方に北川派能島流という最新の船軍法を小石元俊に授ける大役を果たしており、赤間関の商家出身ながらも相当に高いレベルの教養人であったと結論される。

### (3) 小石元俊と久保季道の交渉意義

水軍術伝授を媒介とする小石元俊と久保季道の結合は、その後の当地医界に種々の影響を及ぼしている。最後にこの点を考察したい。

まず注意すべきは香取文伯の上京選師の一件である。本件は到底元俊と無関係であったとは思われない。文伯が多数ある京儒中より淇園を選んだ理由はどこにあったのか。一般に著名家への入門に際しては関連情報の整理集約と紹介人脈の確保が優先されるが、文伯の場合、京の小石元俊と師弟関係にあった実父季道や既に入門を果たしていた府医子弟の助言を参考とすることが可能であった。

一方長府藩側の事情にも留意すべき点がある。元俊の西遊時、一部藩医の傲慢な振舞が問題視されていた。具体的には匙医の外向療治の勤怠が挙げられ、明和4年には督励書が出されている<sup>48)</sup>。また同日付布達には学問・武芸を奨励する条目があり<sup>49)</sup>、藩府が士風退弛の阻止に躍起となっていたことが窺える。明和前後の長府藩ではこのように文武衰微し、医道倫理の低下も著しく、これらが藩政上の大きな課題となっていた。従って碩儒名匠の薫陶の下、長府医界再建の指導的役割を担う知徳兼備の人材の育成は実に急務であったといえよう。勿論藩内には長府医学の現状を憂え、古方や蘭方といった新医学を積極的に導入し、技術的、道義的向上を真摯に目指そうとする革新派も存在した。この一派には独嘯庵の甥松岡道遠、儒業専務となって藩教学の整備拡充を主導した実弟小田済川があり、新進気鋭の古方医香取太華もその同心者であった。これら進歩的儒医の尽力によって、長府藩医の新しい京坂遊学ルートは開拓されたのであり、早い段階で有望な漢学修業先の1つとして確保されたのが他ならぬ皆川塾で

あった。

長府藩医の子弟が淇園の学塾に入門するのは安永7年を濫觴とする。この点は大いに注目される。小石元俊が亀井南冥から大著『元衍』の文章の拙さを指摘され、淡輪元潜の紹介で淇園に入門したのは安永6年11月11日<sup>50)</sup>、その3月後に長府藩医の子弟2名が入門<sup>51)</sup>、さらに2月後に1名が入門している<sup>52)</sup>。該当する3名は以下の諸士である。

(安永7年春2月28日)

- ①長門長府人 内藤仁庵  
陵 字長卿 廿四歳  
②同 菅 玄長  
道泰 字子卿 十七歳

(安永7年夏4月18日)

- ③長門長府人 稲垣一貫  
故平道 字一貫 廿五歳  
紹介 石橋 隆

菅家は長府筆頭藩医、内藤家はこれに次ぎ、①②は将来、長府医界の枢要に位置する身であった。明和4年に譴責された3匙医中には、両者の父の菅雲盛と内藤好庵が含まれていた。子息の入塾はその反省に基づき、仁医育成を目的とし、さらには藩法の学術奨励を率先実行する明確な姿勢を示したものと見えよう。なお両者はこの後、賀川門で医を学ぶ<sup>53)</sup>。③は長く不明であったが、墓碑から香取文伯であることが判明した。遊学には養父の同意が得られず、出奔同然に上京したため本名を憚ったのであろう。紹介者は石橋隆(松山藩士)とあるが、実質的には実父の水軍術門弟小石元俊、先行した菅・内藤の府医子弟による勧誘助勢の結果の選師であったと認められる。元俊と文伯の入門はわずか5カ月の差であるから、懇談の機会もあったに相違なく、その際には実父季道の話題も出たものと見られる。

第2陣は6年後の天明4年4月に入門する竹中良哉(在馬関、長府藩医)と田村董仲(清末藩医)である<sup>54)</sup>。この両者は元俊の西国漫遊中に対面が確認され、旧知の間柄であった。両医の修学についてはいっそう元俊の関与が濃厚である。ことに



竹中氏の場合、前年の山脇東海入門に際しては元俊が取次者となっており<sup>55)</sup>、これこそ長閑医界に対する元俊の影響を明確に示す貴重な資料といえる。なお伝授地とされる三田尻の医家はこれに比べてやや遅く、寛政期に入ってから陸続と入門が果たされた。先蹤となったのは南部宗俊（孝達）であり、この紹介者もまた小石元俊であった<sup>56)</sup>。

後年、元俊門下で名を成すのは南部伯民、齋藤方策といった三田尻出身者が多いが、明和～天明にかけては下関人との交流が優勢であった。これはひとえに永富独嘯庵とその一族たる小田濟川、松岡道遠の長閑医界での確固たる地位、評価と関係する。元俊はその縁から長府、清末両侯の診療にも関与し、当地人士との親密度は京医中の最右翼に位置した。この事実は『西游再功』にも確認できる。長府では小田濟川邸に寄寓、清末では藩侯の招きで三日間滞在、藩医田村董仲、中山梅室、藩儒国島京山（亀門高足）以下、重役連（家老内藤右衛門、渡辺主計、側用人津田伝右衛門、目付高野文右衛門）の歓待を受けた<sup>57)</sup>。赤間関では竹中良圃、中亮、中野喜市（肥後屋）、御手洗武照（御手洗屋）等と歓談、これら当地の諸医から聞き得た処方是他地に比べて格段に多く<sup>58)</sup>、元俊と下関地域の関係の深さをはっきりと示している。しかも『西游再功』には登場せず、元瑞「伝状」が三田尻伝授、萩藩儒官と記した点に眩惑され、尋究の必要に思い至らなかった久保季道も、実は本論に考察した通り元俊の長閑人脈の一角を占める人物であったことが判明し、これらによって小石元俊の防長での知のネットワークが、予想以上に広汎堅固に構築されていたことが理解できる。

久保季道の次男平道は香取家に養子に入った後も学業に出精、明和4年～安永2年まで萩明倫館に在籍した。これは養父香取太華と萩藩儒の親交により実現したものと見られる。前引『長門癸甲問槎』中に太華とともに登場する萩藩儒山根南溟（?-1795）に「双珠閣主人の華筆を貽るに謝す」（『南溟先生詩集』巻3）<sup>59)</sup>と題する七絶がある。双珠閣は香取家に設けられた高樓で客館を兼ねた。命名は神功皇后伝説に起源する満珠・干珠の2鳥が眺望されたことに由来する。ここに両者の

交誼が確認でき、またその交遊圏には太華の他、小田濟川、国島京山、永富亀山、豊浦被葛翁<sup>60)</sup>、繁沢豊城<sup>61)</sup>があって、南溟は長府・清末藩関係者と相当に緊密な交渉を保っていたことが知られる。以上の諸点を勘案すれば、香取文伯の実父たる久保季道についても、多少なりとも萩の諸儒とは交流があったように推断されるのである。

明倫館4代学頭山根華陽（1697-1771）については、北川汝陽の墓碑撰者として第1節に示したが、華陽の子が南溟である。山根父子は三田尻船手組に属する手舸子の出身であった。5代学頭の倉野門（1703-1776）も船手業家（中船頭）に生まれ、長く都講の職にあった小田村郷山（1703-1766）の実家もまた水軍小吏たる楫取であった。この4儒は皆三田尻越氏塾に学んだ後、学問優秀をもって萩明倫館に進み、徂徠学を修めて学官に登用された諸士である<sup>62)</sup>。18世紀の萩明倫館では、このように三田尻水軍の下班出身者が学事を総掌していたのである。小石元俊の船軍術伝授が行なわれた明和5年（1768）は、倉野門の学頭期に当たり、三田尻警固方出身者による藩学支配が最盛期を迎えていた。

筆者は先に元俊の船軍法習得には内外両因が作用したと述べたが、外的要因には以下の3点が考えられる。第1に独嘯庵師の持つ萩明倫館、馬関の町医富商、長府・清末藩士という異なる3方向の人脈が元俊の人的交渉の幅を広げ、水軍術選師の一助となったと見られる点である。第2に長府藩内における忠孝武備を忘却した武人の実態、武芸稽古の奨励厳達等を実見乃至聞知した結果、生来の軍学嗜好が刺激され、一段と過熱奮起するに至ったと思われることである。そして第3には当時の萩藩学に現出した特殊状況、つまり三田尻船手方の業家・賤吏出身者が次々と藩儒に抜擢され、学頭祭酒、都講、侍読、侍講等の主要儒職の大半を占めた萩藩の人事傾向、延いては教学風潮の問題が指摘できるかと思うのである。元俊はこの事態を前に水軍学と儒医学の間に何らかの相関性のあることを洞察し、自己の兵医同理説への応用を模索した。そこで諸儒の故郷たる三田尻に滞在、水軍法伝習に意欲を示したのではなかったら

うか。一方三田尻の船手衆も藩教学を牽引する儒官が自分たちと同じ出自を持つ点を誇り、また勉学次第で出世可能なことを悟って、学問修業、家学伝授を活発化させ、遠来の入門者を歓迎する傾向があった。よって当時の三田尻は類稀な好学精神、立身志向の充溢する地域となり、修学に好適な環境が醸成されていた。それゆえに元俊も水軍術習修に高い集中度で臨むことが可能となって、短時日に奥旨皆伝を得られたものと見られる。加えて萩明倫館は独嘯庵師の学問的源郷に位置し、その影響下にある三田尻での修学は、師学の特質や評価を探る上でも好機と捉えられたに相違なく、元俊の思想・学問の形成に深い意義を有する極めて重要な出来事であったと指摘できよう。

### おわりに

小石元俊が兵学に強い関心を持ち、別して船軍法に精通していたことは、冒頭に触れたように近親者の残した2種の伝記及び複数の允許状の伝存から史実と認められる。そのため医史学家的手になる元俊伝は必ず本件に触れはするが、伝状の内容を越える説明の追加には至らず、結局の所「元俊と水軍術」を主題とする専論の出現は本稿を待たねばならなかった。筆者は近世防長及び閩門地域の医史研究をライフワークとする。斯学研究を志す者にとってバイブルともいうべき大著『防長医学史』は触発される部分が多いが、事項による粗密やあるべき分野の欠落も指摘でき、これらの補填と開拓が精緻な新防長医学史構築に向けての基礎作業となることは無論である。ことに来訪医家の活動と交渉史的意義の究明、及び馬関医史研究の両点は殆ど言及がなく解明が急務であったが、本論はこの2つの課題に対し同時に意欲的アプローチを試みた初の論考であることも付言しておきたい。

元俊研究において水軍術は極めて重要なキーワードである。本論では特に伝授段階にスポットを当て、承伝流儀、修学動機、教授者とその周辺事情を明らかにし、さらに元俊の当地来遊の意義を防長医学発展史の視座から探ったが、要点を整理すると次のようになる。

元俊は明和5年12月、西国漫遊の復路に周防三田尻で北川派能島流水軍術の皆伝を受けた。伝習の動機には萩藩学における水軍出身者の躍進、長府藩の文武奨励策による発奮等が指摘でき、さらには元俊の内部で姿を整えつつあった医兵同理説の基盤形成とも無縁ではなかった。伝授者久保季道は馬関の富商山県屋の一族として実在した。季道は毛利家の宗支藩の儒医と交流があったが、これを萩藩儒と断定する証は現段階では得られなかった。幼少より俊英の誉が高かった次子平道は、長府藩医香取太華の養嗣子に迎えられ文伯と名乗り、明倫館修学後はさらに稲垣一貫と変名して皆川淇園に従学、学問益々進んだが29歳で早逝した。平道の淇園入門に際しては実父の水軍術門弟であった小石元俊の関与が濃厚に疑われる。また元俊の紹介により京坂の有力儒医に入門する下関や防府の医家が出現、ここに防長と小石家2代に渡る深い交流の端緒が開かれることとなった。季道の女婿4代山県右右衛門尉(久保富完)は敬愛する義弟文伯の死に接し、その訃を旧師に報ずるとともに墓碑銘を乞うことを目的として、天明2年9月に下関より上京した。その際、豊西郡小串村耕雲寺の釈智珊(20歳)を同道、同月20日に皆川塾への入門を仲介した<sup>63)</sup>。義兄は縁故の縊徒を預けることが、せめてもの亡弟の供養になると考えたのであろう。それほどに富完の悲しみは深く、将来を嘱望された文伯の死は一族を落胆させる凶事であった。

以上の諸点が明らかとなった結果、先行する元俊伝の補完が可能となり、一方に修訂の必要な箇所も判明し、かくして小石元俊研究は停滞期間から脱して新たなステージへと進むこととなろう。なお今回の考察は著名医家研究における地方資料の積極的活用という点からも方法論的示唆を与えたかと思われる。今後も微力ながら当地に散在する医史料の掘り起こしに精力的に取り組み、防長・閩門の医史研究のさらなる充実を期す所存である。

注

- 1) 山本四郎. 小石元俊伝研究. 医譚 1957; 復刊 16: 8-9
- 2) 山本四郎. 小石元俊. 人物叢書 143. 東京: 吉川弘文館; 1967. p. 26-27
- 3) 注 2): p. 37
- 4) 京都の医学史資料編. 京都府医師会編. 京都: 思文閣出版; 1980. p. 91
- 5) 小石大愚先生行状. 呉秀三. 富士川游編. 医史料 (1). 東京: 医史社; 1895; p. 11 原文: 至周防三田尻. 受水軍之法於久保季道 (名仲道. 称彦右衛門).
- 6) 注 4): 究理堂文書目録. p. 122
- 7) 白石栄著. 桃花洞遺稿. 2巻2冊. 漢詩文. 安永10跋. 鶯軒文庫. 内閣文庫蔵
- 8) 注 4): p. 119
- 9) 注 2): p. 2
- 10) 注 4): 「先考家系将種に出て兵学に志深かりし」
- 11) 注 4): 「医は兵理を知らずんはあるへからず (中略) 医理を論するに兵を以て譬を取られし事多くして, 尋常世医の文章とは事変り候事多し」
- 12) 野口武彦. 江戸の兵学思想. 東京: 中央公論社; 1991. p. 7-10 なお筆者は文庫版 (中央公論新社; 1999) に拠った.
- 13) 注 2): p. 34-36 山本博士がそのように解釈したのは, 多分に米谷「行状」の記述順序が影響を与えたものと思われる.
- 14) 注 6): 同
- 15) 注 2): p. 34-35
- 16) 注 6): p. 121
- 17) 中世の村上水軍中には沖島村上氏 (森本繁. 村上水軍全史. 東京: 新人物往来社; 2008. p. 62) があつた. また『村上三家由来記』(愛媛県立図書館蔵) には因島村上家の外様旗下諸大將衆の1人に「沖十郎弘豊」(松岡進. 瀬戸内水軍史. 愛媛: 瀬戸内海文化研究所; 1966. p. 477) なる人物も確認される.
- 18) 山根泰徳校. 吉田子徴輯. 華陽先生文集. 10巻3冊. 皇都: 博文堂田中市兵衛; 明和6年刻本 (山口県立文書館. 吉田樟堂文庫. 614) なお同館毛利家文庫所蔵「譜録」には「北川三家分散逸」とあり, 系譜の詳細までは確認できない状況にある.
- 19) 合武三嶋流水軍並神器陣一件. 壹 (文化9年一文政11年). 文政元年の条 (毛利家文庫. 文武98)
- 20) 近世文芸者伝記叢書 (9). 東京: ゆまに書房; 1988. p. 290-291
- 21) 井上就光述. 北川堅壽編. 舟戦以律抄. 写本1冊 (吉田樟堂文庫. 1077)
- 22) 萩藩閩閩録 (3). 山口県立文書館編. 徳山: マツノ書店; 1995 復刻. p. 40-44
- 23) 注 4): p. 94
- 24) 能島流秘伝目録極意目録注解. 写本1冊 (毛利家文庫. 文武147)
- 25) 森重都由著. 伊井春樹訳. 合武三嶋流船戦要法 (上). 東京: 教育社; 1979. p. 26 p. 34-38 三島安精. 水軍. 東京: 青磁社; 1942. p. 164-179 御蘭生翁甫. 毛利水軍と三田尻船廠. 防府: 私家版; 1929. p. 7-12等を参照し, それらの記述をもとに導いた筆者独自の見解である.
- 26) 三田尻諸芸御賞美一件. (毛利家文庫. 文武86)
- 27) 防府市史史料Ⅱ 近世編 (上). 防府市史編纂委員会編. 防府: 同市; 1996. p. 507
- 28) 明和元申11月13日改業人分限帳. (毛利家文庫. 給録108) また貞享一文政期の「文武業家四拾三人被召仕並勤功」(毛利家文庫. 文武175) 中にも久保氏の名はない.
- 29) 河野養哲と越氏塾. 防府市立華浦小学校洗心園教育研修部編. 防府: 私家版; 1960. p. 91
- 30) そもそも萩宗藩士に久保氏は1家しかなく, また沖氏は存在しなかった. 『萩藩給録帳』. 『地下上申』. 『防長風土注進案』他, 同時期の詩文集や三田尻関係の文書類にも極力目を通したのであるが, 陪臣等も含めてその名は検出できなかった.
- 31) 東三田尻町: 専光寺. 光妙寺 お茶屋町: 正福寺. 明覚寺 国分寺町: 法花寺 岩島: 極楽寺の防府市内6カ寺を調査した.
- 32) 天保九年赤間関人別帳. 下関市史編修委員会校訂. 下関: 同市役所; 1959
- 33) 伊藤房次郎. 関の町誌 (下). 郷土物語 22. 下関: 郷土史研究会; 1940. p. 135 p. 138
- 34) 注 33): (上). 郷土物語 21. 1939. p. 48 なお旦那寺は大坪の了円寺 (真宗本願寺派) であるという. 同寺には確かに「山形屋累代之墓」と刻む明治年間の立派な御影石製の1基があるが, 既に無縁となって寄墓中に移されている.
- 35) 注 34): p. 52
- 36) 増補改訂芦屋町誌. 福岡県遠賀郡芦屋町編. 芦屋: 同町役場; 1991. p. 243
- 37) 藤本春秋子. 芦屋の墓誌と碑誌 (上). 芦屋: 私家版; 1982. p. 18
- 38) 武内博編著. 日本洋学人名事典. 主要洋学者門人帳 (吉田長淑). 東京: 柏書房; 1994. p. 531
- 39) 注 4): p. 53. No. 345
- 40) 山根華陽等. 長門癸甲問様. 2巻2冊. 明和2年刻本. 長門明倫館蔵版 (吉田樟堂文庫. 1212) 冒頭の「長門癸甲問様姓名」中に「太華, 姓香取, 名文圭, 字子璋」と見える. また巻1の成龍淵と滝鶴台の筆語中には, 在坂独庵庵に関する話題も交わされている.
- 41) 下関市立長府図書館蔵
- 42) 香取修武書簡其外香取大華関係メモ一括14種. 1960. 小川五郎収集史料 379. 山口県立文書館蔵.
- 43) 下関の記念碑山陽地区編. 下関市教育委員会編. 下関: 同委員会; 1987. p. 16 本書には日頼寺にあると記載するが, 今日では該当する古墓を寺域に確認

- することはできない。
- 44) 皆川淇園. 淇園詩文集. 高橋博巳編. 近世儒家文集集成(9). 国会図書館本影印. 東京:ベリかん社; 1986. p.326
- 45) 拙稿. 18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について. 日本医史学雑誌 2008; 54(1): 39-47
- 46) 下関市史資料編I. 下関市史編修委員会編. 下関. 同市. 1993. p.317
- 47) 山県屋墓地には「芳誉離艶(俗名永富氏女)ノ寛延2巳(1749)正月2日」なる墓石がある. 独嘯庵養家たる永富氏と山県屋はごく近距離にあり, 姻戚であった可能性も否定できず, 永富, 久保, 香取は縁族となって強く結合していたのやも知れぬ.
- 48) 注46): 資料編VI. 2001. p.122 p.130「御条目并御家中御定法」(桂家文書. 明和4年12月25日)
- 49) 注48): p.131に見える「御家御条目」(明和6年10月7日)の内容も参考となる.
- 50) 皆川淇園門人帳. 宗政五十雄等編. 名家門人録集. 上方芸文叢刊(5). 東京:八木書店;1981. p.43. No.399
- 51) 注50): p.43-44. 内藤=No.400. 菅=No.401
- 52) 注50): p.44. No.411
- 53) 注4): 賀川門籍. p.336-337 菅は天明8年, 内藤は寛政7年に入門.
- 54) 注50): p.51-52. 竹中=No.491. 田村=No.493
- 55) 注4): 養寿院玄沖門人録. p.287
- 56) 注50): p.64. No.619
- 57) 注1): 10-11
- 58) 注1): 9-10
- 59) 山根南溟. 南溟先生詩集. 3巻3冊. 摂陽. 敦賀屋九兵衛等. 寛政9年刻本(吉田樟堂文庫. 156)
- 60) 長府藩領出身の儒者で江戸に暮らした. 後に南総に客となって終る所を知らずと西島蘭溪『弊帚詩話』附録(嘉永2年序刊)は記す. 著に『老子妄言』等がある. 南溟が小田済川に被葛の藩儒登用を薦めていたことが, 巻3の寄贈詩数首から知られる.
- 61) 明倫館6代学頭. 実父は長府藩医上領白仙. 『華陽先生文集』巻1には白仙の八十寿の祝詩も見える. 上領白仙は本草学に詳しく, 長府図書館には『訂正本草綱目』, 『校正本草考異』, 『本草附方』が稿本で伝存する. なお同館は『本草綱目』2種を蔵するが, このうち1種は永富亀山・松岡道遠の旧蔵本であることを蔵書印から確認した. 下関文書館刊『古医書目録』(郷土資料目録11. 1985)にはこの点への言及がないので今回ここに報告しておく.
- 62) 笠井助治. 近世藩校に於ける学統学派の研究(下). 東京:吉川弘文館;1970. p.1284-1287
- 63) 注50): p.57. No.548 耕雲寺は同地に曹洞宗寺院として現在も存続する.

# Research on the Naval Warfare Strategy of Genshun Koishi and Associated Issues

Kazukuni KAMEDA

Kyushu International University, Junior and Senior High School

When Genshun KOISHI visited the Chugoku and Kyushu regions, he studied naval warfare methods at Mitajiri. This paper reports the following 5 findings, analyzing the old materials in Bocho.

- 1) The naval warfare methods that Genshun learned were those of the Noshima School of naval warfare strategy, as newly modified by KITAGAWA.
- 2) Kido KUBO really existed in Shimonoseki as a wealthy merchant of the Yamagataya family.
- 3) Kido's second son was Bunpaku KATORI, who was a doctor in the Chofu Domain. Bunpaku learned from Kien MINAGAWA at the same time with Genshun.
- 4) Genshun's motivations for learning naval warfare strategy were the following two: the first was that he had been interested in military study, and the second, which was the more important, was that he knew that many of the learned among the Hagi Domain were originally from the navy government officials.
- 5) Genshun's visiting to Bocho was a good opportunity for himself. Additionally, it made a great progress in the medical circles of Shimonoseki and Hofu.

**Key words:** Genshun KOISHI and Bocho, Kido KUBO, The Noshima School of naval warfare strategy as newly modified by KITAGAWA, Bunpaku KATORI, Kien MINAGAWA